

氏 名	顧 真源
学 位 の 種 類	博士（造形）
学 位 記 番 号	第 D0001 号
学 位 授 与 日	2019 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目 和文	型染についての研究と制作——中国と日本の差異を踏まえ、現代の型染を考察する
英文	Research on KATAZOME and design — Based on the difference between China and Japan
審 査 委 員	主査 教授（研究補助教員） 鈴木 マサル
	副査 教授（研究指導教員） 須藤 玲子
	副査 准教授（研究補助教員） 長井 健太郎
	副査 教授 池上 英洋
	副査 准教授 藤井 匡

## 博士論文要旨

本博士論文では、中国をルーツとし、日本で独自に発展した「型染め」を取り上げ、二国間での分析を行い、染色技法の比較考察を通じて、型染めの染色技法を総合的に把握し、現代に即した「型染め」の在り方を提示することを試みている。

本論は 4 部構成になっている。最初は私が考える「伝統」について考察した。民衆文化は、人間が創造した最も古い文化である。なぜなら、民衆文化は人間の日常生活に関わり、時代とともに常に変化しているからだ。民衆文化は社会文化の基礎である。そして、多くの技術が表現手段として生まれた。歴史に従い、それらの技術は次第に洗練され、「伝統」となる。「伝統」は人間の文化、信仰、風習、知恵、美意識の象徴として存在し、人々に受け入れられ現在に至る。

しかし近年、若い世代にとって「伝統」という言葉に対する認識が薄くなっているように感じられる。こうした伝統への関心の薄さは、伝統の衰退を招くと考え、「伝統」を発展させる新たな表現を探ることにした。

本研究では、日本と中国の伝統染織技術が、現代の社会や生活にどのように関わり、次の時代に継承していけるかを検証し考察する為、中国では宋代（960 年－1279 年）に発展し、日本に伝搬した「型染め」に焦点をあて検討した。

第 1 章では、研究の背景及び既存の研究による問題点について調べ、それらの内容を踏まえて本研究の目的を設定している。既存の研究による問題点は 2 つある。一つは、文様のデザインが古いことである。今まで型染の文様に変化が少なく、現代生活に合うものが少ない。もう一つ目は機能性である。現代の人々が、デザイン、品質だけではなく、機能性を多く求

めていることに気付いた。作品をセレクトショップ、百貨店で展示販売した際、商品を手にとった方は、どのように使用するのか考えてから商品を購入する方が大多数だった。そうした経験、調査を経て、研究目的は消費者のニーズに合う商品のモデルを創作し、最終的には型染を用いて、現代の生活に合うテキスタイルデザインを制作し、伝統的な美しさを人々に伝えることを目的とした。

まずは、染技法の研究のため、日本と中国の特徴を分析した。芹沢銈介・柚木沙弥郎・鎌倉吉太郎等型染研究者の作品を参考として、日本の型染文様の特徴を分析した。一方、中国の伝統文様の中は吉祥文様が多い。吉祥文様とは、縁起が良いとされる動植物、物品などを描いた図柄を言い、特に中国文化圏を中心としたアジアで広く愛されるものが多い。

第2章では、二国間での表現方法の差異を考察する為、参考文献を調査することで、中国と日本の型染の歴史的背景を検証した。中国の藍印花布と日本のこれまでの代表的型染めの手法、それぞれ誕生の背景と時代を調査し、技法の特徴を分析した。そこで型染が時代を経ても存在している理由を次に挙げる。

最初に、技法の起源を調査することで型染と藍印花布の関連性が分かったと仮説を立てた。そこで両国の染色について分析を始めた。まず、日本では、型染は型を使って文様を染める染色法であるとされているが、その中には、型紙を用いた紙型染のほか、木版、金属版を用いたものもある。こうした技法の特徴として、同じ文様を反復あるいは量産できることにあつた。現在、型紙と防染糊で制作したものを型染と呼び、木版、金属版あるいはシルクスクリーンによるものをプリントと呼び、区別している。一方、中国の藍印花布は、型紙を使って藍で染める染色法、またはその技法で染めたものを指す。「灰縵」とも呼ばれており、特徴は木綿の生地を藍で染め、ガリガリな糊がついたままの状態での完成となる。糊を揉み、洗い流すことで、白い文様が出て来るが、意図的に糊は落とさない。あくまで結果的にであつて、使用とともに糊が落ちていく。

藍印花布は宋代（960年－1279年）から始まったが、実は型を用いた染色技法が秦漢時代（世前221年－220年）には既に存在していた。明清時代（1368年－1911年）になると藍印花布技術は一般家庭にも普及し、各家に織り機と藍釜が置かれる状態になった。1940年代になると、新たな染色方法と化学染料が広まり、かつ国民の美意識の変化によって藍印花布産業が衰退し始める。

これら歴史を分析すると、日中とも、染色方法やデザインについて繁盛していた時期と衰退している現在とで比較すると違いは少なかった。昨今、安価に生産できる他の染色方法が増え続けるなか、型染めはデザイン、生産方法を見直す必要があると仮説を立てた。

第3章では、対象工場を選定し、型染の現状を調査した。その結果、日本と中国の型染については、「糊」と「型紙」が重要な原材料とされていた。そこで効率の良い「糊」と「型紙」を開発する為、それぞれを比較しデータベース化した。

型染の仕上がりは、型糊によって決まると言える。日本では、糯粉・糠・塩と石灰、この

4つの原材料で生産した糊が一般的な型糊である。一方、中国の型糊（藍印花布用糊）は、大豆粉と石灰のみを混ぜたものが主流である。藍染などの浸染の場合は、日本の一般的な糊を改良しない限り広幅の生地を使用することが難しい。糊と生地が、重なることでくっついてしまうのだ。また、中国で使われている大豆粉と石灰から作られた糊は、日本ではあまり使われていないが、効率の高い糊であれば日本での使用も可能であると仮定した。そこで日本と中国の型糊のメリットとデメリットを理解するために実験を行った。方法は、日本の糊と中国の糊を使い、様々な作品を制作し、結果を分析した。

次に型紙について研究では、手彫の型紙とレーザー加工機の型紙を比較研究を行った。型紙は、型染の文様を表現するための道具である。型紙を彫るには、繊細な技術、長い経験が必要とされている。実際に一枚の型紙を彫るのに多くの時間が必要とされる。しかし最大の問題は職人が高齢化し、後継者が少ないことだ。だが、これまでずっと人の手で作られてきた型紙も、昨今では技術の進歩によりレーザー加工機でも制作することができるようになった。実際に型紙を制作すると、作業時間の圧倒的な違いが証明された。また、制作した型紙でそれぞれ型染を行い、作品の分析した。その結果から、それぞれの作品に特徴が現れた。その結果をふまえ、メリット・デメリットをまとめ応用の可能性を探った。

第4章では、第2、3章で得られたデータに基づき作品を制作した。オリジナル作品の制作に入る前に、型染の表現について分析を行った。第2章でリサーチした歴史の他に、モチーフの表現についても細かく分析を行った。型染の起源を理解するだけではなく、歴史的背景などについても検討した。

まず、日本の代表的な型染——江戸小紋、長板中形と紅型を例として、文様の特徴をまとめた。江戸小紋は、点や線など、一つ一つが規則正しく配置されている。長板中形と紅型は、風景をモチーフとして、絵画のように表現されていることが多い。小紋より決まりは少ないが、繊細さについてはおおよそ同様である。

また、中国の藍印花布文様のリサーチでは、地域によって特徴が異なり、同じモチーフでも地域によって表現が違うことを発見した。それは、型紙を彫る道具の切れ味や、型糊の溶解度の低さ、糊の成分の粗さ、また型紙の牢度などが関係しており、昔の職人は写実的なデザインよりも、モチーフの特徴を大胆に誇張し、他の部分を簡略化し、職人の感性により表現する必要があったためと考えられる。各作品の特徴は、文様が抽象的な表現となるため、職人は意匠を凝らして製作をする。その結果、地域、時代によって表現に差異が生まれるのである。これら藍印花布の差異は、生産される地域、職人によって生まれるため、時代のギャップにも適応できる可能性があると考えた。

現代の先駆者がつくる型染の変化を分析する為、型絵染人間国宝——芹沢銈介と藍印花布人間国宝——王振興と呉元新について調査した。

芹沢銈介には独自性がある。作品のモチーフはすべて自分の生活に馴染みのあるものを選択している。野菜、道具、村の風景、労働している人物など、このような発想は、当時か

ら見るととても斬新といえる。また、芹沢銈介の作品といえば文字を思い浮かべる方も多いだろう。それらは芹沢銈介自分の経歴と関係が深いのではないかと推測した。芹沢銈介の経歴をみると、通った東京高等工業学校工業図案科では、最初に絵画技術を身につけ、その絵画を図案化し、また写真と印刷によって普及させるという一貫した技術を学んでいたと推測される。したがって、スケッチ、模様化、型彫り、生産するという流れのなかで、もの作りをしていた。その流れは芹沢銈介が制作した型染の工程ほぼ一致している。この点を見ると、伝統的な型染技法と違い、東京高等工業学校の教育が芹沢銈介に大きな影響を与えたと推測できる。芹沢銈介の作品は斬新であったが、伝統的なモチーフ、表現も散見される。それは沖縄での滞在と関係があるだろう。芹沢銈介の作品は、絵画から出発し、日本の伝統的文化、美を十分理解した上、自分の解釈と新しい視点を加え意匠化したものといえそうだ。

また、中国の王振興と呉元新は、仕事を積み重ねるうちに作品のオリジナルティの重要性を悟った。王振興は、新しい染技法が溢れている現代において、伝統的な技法の利弊を考察し、継承することに尽力した人物である。泥藍の以前の作り方の復元と、デザインの改革という二つの視点から、王振興が藍印花布について発展を試みたのだ。呉元新は藍印花布の発展についてデザインの発展と藍印花布を保護、この二つを提唱した。彼らは、既存の作品に対して、新たにモダンな文様をモチーフを採用し、新しい染め方の開発を常々試みていたという。そして、二人とも積極的に商品を開発し、海外ビジネスにも力を入れた。このような需要を増やすことが藍印花布の展開に効果があり、自分の制作にもインスピレーションを受けた。

つまり、日中の人間国宝とも、工芸の中に新たな要素を取り入れていたことが分った。人間国宝達は自らの感性によって型染を発展させた。その型染は、社会あるいは歴史が生んだ作品というよりも、自らの感性でモチーフを決定し、デザインしたといえる。したがって、元々意味が賦与されているモチーフではなく、自らが意味をモチーフに賦与し、デザインを行うことに制作者としての意味があると考えた。人間国宝達は、自らの感性に従い、印象を受けた通りに対象物を素直にデザインしているのだ。今回の私は、動物に自らの解釈で意味を与え、デザインを計画した。表現は動物の生態や、見た目から受ける印象を貴重なデザイン要素として制作を行った。作品は「カモノハシ」、「タヌキ」、「カタツムリ」、「ヤマドリ」、「ホロホロ鳥」、「エリマキトカゲ」、「マンボウ」と「ヤモリ」の8種類のデザインに対し「美意延年」、「商売繁盛」、「学業成就」、「相思相愛」、「富貴福沢」、「無病息災」、「子孫繁栄」と「家内安全」と8つの四文字熟語を当てはめ、「動物の模様絵——お守りシリーズ」として発表した。お守りのモチーフは伝統的や普遍的なものではなく自らが創作した意味である。先駆者のように、私がデザインした型染の文様が、次の世代へ、さらに新しい世代へと引き継がれることを期待する。

第1章から第4章までで得られた主要な知見をまとめて、本論文の総括とした。

## 審査要旨

顧の研究テーマは日本の伝統的な染色技法である型染めに焦点をあて、丹念な調査と検証を繰り返すことで現代における型染めの新たな意義を創出しようとするものである。その研究手法は非常に堅実なものといえ、技法と文様の両面で先行研究にあたるだけではなく、地道なフィールドワークによって相当量のデーターを取得し、そこで得られた知見を制作へとつなげていく姿勢が明確に打ち出されている。最終的な目的として型染めという伝統技法を現代社会のニーズに合致するようなものへ昇華させることとしているが、これは現代の社会構造の中で伝統工芸を継続させるためには、出来上がったものを経済的に成立させることも無視しえない大きな問題であるとの自覚を背景にしたものといえ、現実的かつ実践的な研究内容といえる。

顧は型染めの歴史的な背景や技法を調査することから始め、自身の故郷でもある中国、南通の藍印花布と型染めとの比較を経て、これら二つの伝統技法が今現在抱えている問題点を抽出し、型染めがどのようにしたら現代の市場で価値を持ち、未来へと継続、発展して行くのかという仮説に対する答えを自らの調査、制作を通して提示した。型染めと藍印花布との比較に関する調査、研究は日本と中国の両国の産地へ足繁く通い、生産者に取材しながら現地で制作する形で行われるなど、仮説に止まらない説得力のある内容となっている。特に素材（型紙、糊、生地）の違いを種類別に制作、実験を行い、その結果に基づいて論理的に結論を導く手法は非常に科学的なものと評価できる。現状抱える問題点として、古典柄が持つ守旧的なデザインの指摘だけではなく、手工芸的要素を重んじるが故に生じる非効率的な生産性やコスト配分にも着目し、レーザーカッターなどのデジタル工作機で型紙製作の検証を行うなど、伝統技法に対する新たな視点を提示した。検証結果としては職人の熟練した表現をデジタル技術で完全に再現したとまではいかなかったが、今後のデジタル分野の技術発展で解決して行く問題と思われる。これら新しいテクノロジーを積極的に導入しようとするアプローチは今後の工芸における先端技術の応用を示唆する内容といえ、非常に興味深い。

色柄やアイテムへの落とし込み等、現代のニーズに対してのデザインの落とし込みは主観的な領域とはいえ、理論研究から導き出された結果を基に新たな表現へと展開させており、吉祥文様からインスピレーションを受けたテーマは独自性とユーモアを感じさせる表現となっている。

特筆すべき点として、型紙の縦方向、横方向共にリピートを付け、それぞれを生地の広幅、着尺幅両方のサイズの生地と1枚の型紙で対応できるように制作したアイデアは生産性の向上だけではなく、アイテムへ落とし込む際の利便性、展開性を感じさせ、商業的な視点からも新規性を感じさせる内容といえる。型染めの着尺幅の生地と藍印花布の広幅の生地、日本と中国の規格が交錯すると共に両国の文化が融合しているようにも見える。型染めの新たな展開性と可能性を提示しており、高く評価されるべきものと考ええる。

ともすると主観的な記述に終始しがちな制作副論文において被審査者が専門とする技法

に関し、日本と中国における歴史的事実を丹念に拾い、また多くの先行研究にあたって積み上げた豊かな知識は、同技法における被審査者の高い専門性を示している。また、該当する専門領域において、国内外のコンペティション等での受賞の実績もあり、研究制作は、評価に耐えられる質が実証されている。

以上の内容、評価をふまえて審査委員 5 人による合議を行った結果、学位の認定に十分に値するものであるとし、顧氏に学位を授与することを全員一致で決定した。

今後はさらに直接の専門領域にとどまらず、西洋における関連技法や東西間での影響関係などの近接領域においてもより広範な学識を身に着けながら、自身の制作に邁進して行くことを期待する。